

女子大生の友人関係における切替についての研究

丸野, 佳乃子
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/1516133>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 15, pp.37-43, 2014-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

女子大生の友人関係における切替についての研究

丸野佳乃子 九州大学大学院人間環境学府

The research of friendship change among female university students

Kanoko Maruno (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu-University*)

This study examines different aspects of friendships between university students, especially with regard to, friendship change, self-change, target-change, basic trust, reasons for friend selection, friend satisfaction, bullying, preventing friendships, and weakening of friendships. According to Otani (2007), change in friendship occurred under the following three conditions: 1) target-change (choosing a friend according to their qualities; 2) self-change (two or more selves change according to the specific atmosphere); and 3) preventing friendships (especially when individuals are unrelated).

The results show that people employ self-change the most during friendship and—as Thuji (2006) stated, it is natural to change the relationship with friends depending on a certain atmosphere. However, the aspect of basic trust should also be considered as a crucial factor in maintaining friendship.

Key Words: Adolescence, friendships, friendship change

1. 問題と目的

現代の青年の特徴を述べるにあたって、友人関係の希薄化という言葉は耳にすることが多い。“青年期は、子どもから大人へと成長していく過渡期であり、おおよそ12, 3歳から25歳ぐらいまでと考えられている”(井上ら, 2005)。“青年期には親子関係から精神的に独立し、自己の判断と責任に基づいて行動するようになる。そのため、悩みや考えをともに語り合える相手として、両親以外に依存可能な相手として同世代の友人を必要とする”(榎本, 2003)。

落合ら(1996)は、“同性の友人関係を「友人との関わり方に関する姿勢(深い—浅い)」と「自分が関わろうとする相手の範囲(広い—狭い)」の2次元で捉え、青年期における友人関係は年齢と共に浅く広い付き合い方から深く親密な付き合い方に発展していく”と論じている。岡田(1995)は、このような“親密で内面を開示し合い、人格共鳴や同一視をもたらす友人関係を、従来の青年期の友人関係の特徴としてあげている。”

しかし近年、青年期の友人関係における“希薄さ”が指摘されており、こうした“内面を開示するような深く親密な友人関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけ合わないように表面的に円滑な関係を志向する傾向がみられる”(千石, 1991)。

一方で富田(2000)は、友人関係の希薄化論に対して、“友人関係には比較的似通った同質の世界の内部に「仲の良い友人グループ」が複数以上あり、そうした「友だち・友人・仲間」に加わるためにそれぞれに細分化された複数の基準にその都度適応するような関係性がある”

ことを指摘している。そこで、大谷(2007)は、友人関係の状況に応じた切替という視点から友人関係を捉え直すことを試みた。その結果、“友人関係を友人と本音で話すのは避けているなどの「防衛」、友人と意見や考えが食い違っても自信を無くしたりしないなどの「自己自信」、どんな人とも仲良くしようとするなどの「全方位的」、友人と分かり合おうとして傷ついても仕方ないなどの「積極的相互理解」、みんなと何でも同じでいたいなどの「同調」、みんなから愛されたいなどの「被愛願望」、などの因子から成る既存観点と、状況に応じた切替という視点の新観点は弁別可能であること、また、友人関係において状況に応じて関係対象や自己のあり方を切り替える付き合い方は、従来の深さ・広さの2次元では整理されないものである”ということが確認された(大谷, 2007)。

大谷(2007)は、状況に応じて友人関係を切替える付き合い方を捉える下位概念として3つ設定し以下のように説明している。“1つ目は「恋愛相談をする相手と進路の相談をする相手は違うと思う」「機嫌のよい日と悪い日とでは一緒にいたい友人が違うと思う」など状況に応じて複数の関係対象を切り替える「対象切替」である。2つ目は「相手のノリに合わせて話題を選ぶ」「その場の雰囲気によって自分の性格が変わる」など複数の自己を切り替える「自己切替」である。3つ目は「いろいろな友人と付き合いがあるのでその友人たちは知らないもの同士だ」「友人との付き合いに他の友人との関係は持ち込まないようにしている」などの、複数の関係間の相互隔離「関係の相互隔離」としている。

大谷(2007)の研究を受けて、友人関係の切替という視点から友人関係を捉え直すことによって、希薄なよう

に見受けられる現代青年の友人関係について、新たな特徴などを見出すことができるのではないかと考えられる。

これらのことを踏まえ、本研究では、大谷（2007）で得ることができた状況に応じた友人関係切替の3つの下位尺度（自己切替・対象切替・関係の相互隔離）について、友人関係の切替はどのような要因と関連があるのかについて調査する。

岡田（2007）は、“友人を選択する理由は「家が近い・席が近い」などの外的で目に見える理由づけから、次第に「相手の性格が気に入った」など相手の内面的な特徴に注目した理由づけへと焦点が移っていく”と述べている。したがって青年期では相手の内面に注目して友人選択をする人が多いと考えられるが、友人選択理由と状況に応じた切替には関連があるのかということは明らかにされていない。また、友人関係における満足度について、鈴木ら（1998）は、“青年期において友人関係で満たされることは、自尊心を高めたり、社会的・情緒的な適応に重大な影響を及ぼす”ことを示している。友人関係における満足感と状況に応じた切替という友人関係のもち方との関連については検討されていないので、切替のタイプによって友人関係の満足度に差があるのかということ調査する。

また、Erikson（1959/1973）は、基本的信頼感について、“健康的なパーソナリティの第一の構成要素であり、生後一カ年の経験から獲得される自己自身と世界に対する一つの態度であるとし、他人に関しては一般に筋の通った信頼（reasonable trustfulness）を意味し、自己に関しては信頼に値する（trustworthiness）という単純な感覚を意味する”と述べている。また、金子（2002）は、“基本的信頼感は青年期の良好な対人関係や親密性と関連していることを示す”と述べている。本研究では友人関係の状況に応じた切替と基本的信頼感の関連を調査する。

さらに、過去の経験として橋本ら（2008）は、“思春期や青年期に学校で経験したいじめがその後の人生に少なからず影響している”と述べている。中島（2007）によると、“いじめを体験したことによる影響は、否定的自己像を維持させたり、友人関係における不信や不安などのネガティブな側面や、逆に、肯定的自己像への影響や友人への共感・思いやりといったポジティブな側面への影響もある”ことを示している。これらのことから、いじめられた経験のあり・なしは友人関係に影響を与えると考え、いじめられた経験のあり・なしと友人関係における状況に応じた切替について関連があるのか調査する。また、現代青年の友人関係の希薄さについては多くの論文などで論じられているが、実際には現代青年が自己の友人関係を希薄と感じているかどうかということも調査する。

本研究では、関係切替のタイプを分類し、友人関係切替と基本的信頼感の水準との関連や、友人関係切替にお

ける友人関係満足度の比較、友人の選択理由などとの比較もし、現代青年の友人関係について検討する。また、いじめられ経験の有無や、自身の友人関係を希薄だと感じているかなどということも調査し、現代青年の友人関係の特徴や問題について友人関係の切替と関連する要因について検討していきたい。また、菅原（1979）によると、“特に女子青年では日常生活で最も気にしていることが仲間・友人のことである”ことから、本研究では特に女子青年の友人関係について調査をおこなう。

Ⅱ. 方法

1. 手続き

日時：2011年5月上旬の大学の講義の時間内に、集団法による質問紙調査を実施した。

2. 調査対象

A県内の女子大学生3-4年113名のうち、記入漏れや調査の対象年齢（25歳以下）以外の被験者を除いた97名を調査対象者とした。（有効回答率85.8%）

3. 質問紙の構成

(1) 友人関係満足度尺度 [豊田（2004）の8項目]：現在の友人関係についてどの程度満足しているか7件法で回答を求めた。

(2) 友人選択理由尺度 [小塩（2002）が石黒（1951）、岡田（1993）を参考に作成した33項目のうち、4つの下位尺度（近接・相手の性格・自己の利益・相手の能力）からそれぞれ因子負荷の高いものを3項目ずつ、計12項目]：どのような理由で友人選択をしているか7件法によって回答を求めた。

(3) 友人関係尺度 [大谷（2007）の18項目（対象切替・自己切替各7項目、関係の相互隔離4項目）]：どのような友人関係のもち方をしているか把握するための尺度。3つの下位尺度で構成された質問紙について7件法によって回答を求めた。

(4) 基本的信頼感尺度 [谷（1996）の11項目（基本的信頼感6項目、対人的信頼感5項目）]：自己への信頼感と他者への信頼感を把握するための尺度。下位尺度は、基本的信頼感と対人的信頼感の2尺度である。これらの下位尺度で構成された質問紙について7件法によって回答を求めた。

(5) いじめられ経験の有無：これまでいじめられたことがあるかどうかの問い。

(6) 友人関係希薄感の有無：自己の友人関係を希薄だと感じたことがあるかどうかの問い。

Ⅲ. 結 果

分析対象者は記入漏れおよび、25歳以上を除いた97名であった。SPSSを用いて以下の分析を行った。

1. 友人関係について

①友人関係のもち方について（対象切替・自己切替・関係の相互隔離）

友人関係においてどういった関係のもち方をしているかそれぞれの下位尺度において、得点に差があるか検討するために対応のある一要因分散分析を行った。その結果、群間の得点差は0.1%水準で有意であった。F(2,192)=8.42 ($p<.001$) (Table 1 参照)。また、Bonferroniによる多重比較を行ったところ、自己切替と対象切替の水準間では、1%水準で有意な差が認められた。

大学生の友人関係においては、複数の自己を状況に応じて切り替えるという「自己切替」が最も使われていて、状況に応じて複数の関係対象を切り替えるという「対象切替」が最も使われていないということがいえる。

②友人関係のもち方と他の要因との検討

友人関係のもち方の尺度（対象切替・自己切替・関係の相互隔離）について、それぞれの得点の上位30人と下位30人のデータを採用し、H群とL群にわけた。友人関係満足度・友人選択理由尺度・基本的信頼感尺度・友人関係希薄感についてそれぞれ対応のないt検定をおこない、有意差が確認された項目のみ以下にまとめた。

(1) 対象切替について

対象切替のレベル（よく行う人H群、あまり行わない人L群）を独立変数とし、友人関係満足度・友人選択理由尺度・基本的信頼感尺度・友人関係希薄感を従属変数にして、それぞれ対応のないt検定をおこなった。その結果、友人関係満足度、友人選択理由（相手の性格・自己の利益）について有意な差があり、友人関係満足度では、L群の方がH群よりも平均値が有意に高く、対象切替をおこなわない人はおこなう人より、友人関係満足度が高いということがいえる ($t(58)=3.15, p<.01$)。また、友人選択理由の相手の性格では、L群の方がH群よりも平均値が有意に高く、対象切替をおこなわない人はおこなう人より、友人選択の際に相手の性格を重視しているということがいえる ($t(58)=2.24, p<.05$)。対象切替と友人選択理由の自己の利益では、H群の方がL

群よりも平均値が有意に高く、対象切替をおこなう人はおこなわない人より、友人選択の際に自己の利益を重視しているということがいえる ($t(58)=2.04, p<.05$) (Table 2 参照)。

(2) 自己切替について

自己切替のレベル（よくおこなう人H群、あまりおこなわない人L群）を独立変数とし、友人関係満足度・友人選択理由尺度・基本的信頼感尺度・友人関係希薄感を従属変数にして、それぞれ対応のないt検定をおこなった。その結果、友人選択理由（自己の利益・相手の能力）、基本的信頼感について有意な差があり、友人選択理由の自己の利益では、H群の方がL群よりも平均値が有意に高く、自己切替をおこなう人はおこなわない人より、友人選択の際に自己の利益を重視しているということがいえる ($t(58)=2.42, p<.05$)。友人選択理由の相手の能力では、H群の方がL群よりも平均値が有意に高く、自己切替をおこなう人はおこなわない人より、友人選択の際に相手の能力を重視しているということがいえる ($t(58)=2.75, p<.01$)。基本的信頼感では、L群の方がH群よりも平均値が有意に高く、自己切替をおこなう人より、基本的信頼感が高いということがいえる ($t(58)=2.04, p<.05$) (Table 3 参照)。

(3) 関係の相互隔離について

関係の相互隔離のレベル（よくおこなう人H群、あまりおこなわない人L群）を独立変数とし、友人関係満足度・友人選択理由尺度・基本的信頼感尺度・友人関係希薄感を従属変数にして、それぞれ対応のないt検定をおこなった。友人選択理由（近接）、基本的信頼感について有意な差があり、友人選択理由の近接では、L群の方がH群よりも平均値が有意に高く、つまり複数の友人関係が相互に関わり合うことを嫌がらない人は嫌がる人より、友人選択の際に近接の条件を重視しているということがいえる ($t(58)=2.12, p<.05$)。基本的信頼感では、L群の方がH群よりも平均値が有意に高く、複

Table 1

友人関係の持ち方の3つのパターンの平均値と分散分析結果

友人関係の持ち方			F 値
対象切替	自己切替	関係の相互隔離	
3.91 (0.78)	4.49 (0.75)	4.1 (0.88)	F=8.42***

注1) ()はSD

注2) *** $p<.001$

Table 2

対象切替のレベル別の検討結果

対象切替	H 群 (n=30)	L 群 (n=30)
友人関係満足度	4.76 (.87)	5.37 (.61)
友人選択理由 (相手の性格)	5.30 (1.07)	5.81 (.64)
友人選択理由 (自己の利益)	4.07 (1.02)	3.56 (.92)

左側：平均値，右側 ()：標準偏差を示す。

Table 3

自己切替のレベル別の検討結果

自己切替	H 群 (n=30)	L 群 (n=30)
友人選択理由 (自己の利益)	4.20 (.86)	3.62 (.99)
友人選択理由 (相手の能力)	4.42 (1.09)	3.56 (1.35)
基本的信頼感	4.27 (.97)	4.73 (.78)

左側：平均値，右側 ()：標準偏差を示す。

数の友人関係が相互に関わり合うことを嫌がらない人は嫌がる人より、基本的信頼感が高いということがいえる ($r(58)=2.11, p<.05$) (Table 4 参照)。

2. いじめられ経験の有無と他尺度との関連

被験者にこれまでのいじめられ経験について質問し、「あり」か「なし」で回答を求めた。ありと答えた者となしと答えた者とは分類したものを独立変数とし、友人関係満足度・友人選択理由・友人関係・基本的信頼感尺度・友人関係希薄感を従属変数にして、それぞれ対応のないt検定をおこなった結果、あり群となし群の間に一部で有意な差があり、友人選択理由の相手の能力では、ありと答えた者の方がなしと答えた者よりも平均値が有意に高く、いじめられた経験がある人の方が、友人選択の際に相手の能力を重視しているということがいえる (Table 5 参照)。

3. 友人関係希薄感について

自己の友人関係について希薄だと感じたことがあるかという質問に5件法で回答を求めた (Fig.1 参照)。希薄だと感じている人が多いかどうかを見るため、js-STARを用いて χ^2 検定とライアンの名義水準による多重比較を行なったところ、自分の友人関係を希薄だとあまり感じない人が有意に多かった (Table 6 参照)。

Table 4
関係の相互隔離のレベル別の検討結果

自己切替	H 群 (n=30)	L 群 (n=30)
友人選択理由 (近接)	4.17 (.66)	4.58 (.83)
基本的信頼感	4.29 (.83)	4.72 (.76)

左側：平均値，右側 ()：標準偏差を示す。

Table 5
いじめられ経験と他尺度のt検定の結果

いじめられ経験	あり (n=41)	なし (n=56)	t 値 (df=95)
友人選択理由 (相手の能力)	4.28 (1.21)	3.76 (1.24)	2.06*

左側：平均値，右側 ()：標準偏差を示す。* $p<.05$

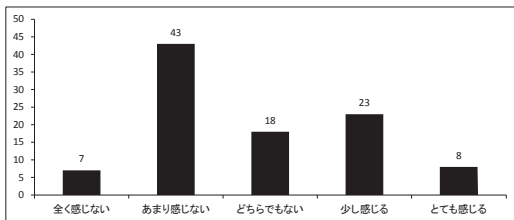


Fig.1 友人関係希薄感

Table 6
友人関係希薄感の χ^2 検定の結果

セル比較	臨海比	
1<2	5.14	* $p<0.0002$
1=3	2.25	ns $p=0.0244$
1<4	2.97	* $p=0.0028$
1=5	0.27	ns $p>.05$
2>3	3.07	* $p=0.0020$
2>4	2.34	* $p=0.0192$
2>5	4.76	* $p<0.0002$
3=4	0.62	ns $p>.05$
3=5	1.77	ns $p>.05$
4=5	2.51	ns $p=0.0118$

IV. 考 察

1. 友人関係のもち方について

本研究は友人関係をとらえる上で、大谷 (2007) で示されている、友人関係における状況に応じた切替という新視点をもとに、現代の大学生の友人関係について、状況に応じた友人関係の切替 (対象切替・自己切替・関係の相互隔離) という視点から捉え、友人関係の切替はどのような要因と関連があるのかということを検討した。

①自己切替について

調査の結果、現代の女子大学生は友人関係において、相手やその場の雰囲気などに合わせて自分の性格や付き合い方を変えるという「自己切替」を最も多く用いているということが分かった。相手のノリに合わせて話題を選んだり、その場の雰囲気によって自分の性格や付き合い方を変えるなどの、複数の自己を状況に応じて切り替える関係のもち方である自己切替を多く用いるというつきあい方は、表面的な付き合いのような印象があり、多くの研究で指摘されている現代青年の友人関係の希薄さとも受け取ることができるような結果のように思える。しかし、辻 (2006) は、“従来の「浅く広い」関係と「深く狭い」関係という対比に加えて、場面場面に応じて友人関係を使い分けるような選択的な友人関係があり、それが今日の若者には比較的多くみられる”と指摘している。これは友人という言葉で表される範囲が広がり、濃密な関係も浅薄な関係も、古い付き合いも新しい付き合いも友人として1つにくくられてしまうために、友人関係が希薄化したように見える場合があるという指摘である。友人関係には、親しい友人もいれば、会えば挨拶をするというくらいの友人もいる。幼なじみといるときと、大学に入ってからの友だちといるときと、ネット上の仲間とパソコンでやり取りをしているときとで、自分の相手に対する態度が違うこともあるはずである。このように、友人と定義される範囲が広がり、友人の種類が多様化しているために、場面に応じて友人関係を使い分けるといふ友人との付き合い方は自然であり、ま

た、その使い分けの手段としては自己切替が最も多く用いられているということがいえる。この、自己切替が最も多く用いられている理由としては、社会の価値観が多様化し、多様な生き方が認められるようになった現代において、多種多様な人間性を持った人々と良好な対人関係を築くためではないかと考えられる。また、吉岡ら(2010)は、“大学生の場合は、履修する講義やサークルやバイトなどの活動時間帯によって人間関係も流動的になる”と述べている。流動的な人間関係の中での友人との付き合いとなると、多様な友人関係が存在すると考えられ、相手や場面に合わせて自分を切り替えるという自己切替が最も多く用いられているということが考えられる。

自己切替と基本的信頼感の関連では、自己切替低群の方が、基本的信頼感の得点が高いということがわかった。金子(2002)は、“基本的信頼感は青年期の良好な対人関係や親密性と関連している”ことを示している。また、松永ら(2008)によると、“ありのままの自分で友人と深く関わる青年は乳幼児期の経験を根底として形成される基本的信頼感も、現実の人間関係に基づく他者への信頼感も高い”と述べている。このことから、自己切替低群の方が自己切替高群よりも基本的信頼感の得点が高いということは、現代青年の友人関係において、基本的信頼感という側面から捉えると、自己切替をおこなうという対人関係の持ち方は良好な対人関係とはいえない可能性があるということが考えられる。また、前述している選択的な友人関係を持つことの理由としてあげている、多様化した友人関係における対人関係の変化ということと併せて考えると、選択的な友人関係というものは現代多くみられるが、そのような対人関係は基本的信頼感が低い人ほど持ちやすい関係であるということがいえる。

一方で、友人選択理由に関しては、自己切替高群は自己切替低群よりも相手の能力を重視していて、自己切替高群は自己切替低群よりも友人選択の際に自己の利益(物を貸してくれる・いろいろと手伝ってくれる・面白い人だから)を重視しているという結果が得られた。

これらのことから、自己切替をよくおこなう人は、自分を切り替えることによってより自分に利益のある友人関係を持つようとしているのではないかということがいえる。また、多様な人間関係の中で自分にはないものを持っている人と付き合い合っているということも考えられる。しかし、岡田(2007)は、“友人を選択する理由は外面的で目に見える理由づけから、次第に相手の内面的な特徴に注目した理由づけへと焦点が移っていく”と述べていて、青年期にあたる本研究の対象者が自己切替を最も多く使用していて、自己切替をする際には相手の能力や自己の利益で友人選択をしているということは友人

選択の発展の仕方という面からみると、このような外面的な友人選択理由は、これまでの青年期の友人関係の研究とはずれがある。本研究では、なぜそのような友人選択をしているのかなどの内容に関する質問はおこなっていないためはっきりとわからないが、友人選択の理由を探り、青年期の友人選択理由とのずれについて考えていくことによって、友人関係の持ち方についてより詳しく検討できると考えられる。

②関係の相互隔離について

友人との付き合いにおいて、自分の友人にA子とB子という人がいた場合、自分の仲の良い友人としてA子とB子にも仲良くしてもらいたいとは思わないというような、友人関係において他の友人との関係は持ち込まず、複数の友人関係が相互に関わり合わないようにする関係の持ち方である関係の相互隔離をおこなっている人は、自己切替に次いで多かった。しかしこの2つの得点の平均値の間に有意な差は認められていない。

関係の相互隔離について、大野ら(2010)によると、“年齢が進み、まわりに合わせるよりも自分らしくいたいと思う年齢になると、集団凝集性は低くなる。また、個人と個人の間の関係性を基盤として友人関係を築いていくには必ずしも集団という枠組みは必要ない”と説明している。このことから、青年期にあたる本研究の対象者が個人同士の関係というものを重視し、関係の相互隔離をおこなっているということは起こり得ることであると考えられる。

他尺度との関連については、関係の相互隔離低群の方が関係の相互隔離高群より、基本的信頼感が高かった。関係の相互隔離をしていない人の方が基本的信頼感が高いというこの結果は、金子(2002)の、“基本的信頼感青年期の良好な対人関係や親密性と関連している”ということから考えると、関係の相互隔離という友人との付き合い方はあまり良好な対人関係ではなく、親密性も高くない可能性も考えられるが、今回の調査では関係の相互隔離と友人関係満足度との間に関連がみられなかったこともあり、そこまでは測れていない。また、関係の相互隔離低群の方が関係の相互隔離高群より、友人選択の際に近接(家が近い・学校が同じ・一緒に遊んだり勉強したりする)の理由で選択していた。関係の相互隔離をしていない人の方が近接の理由で友人を選択しているという結果は、関係の相互隔離をしている人は、それぞれの友人同士の繋がりを求めていないため、関係の相互隔離をしていない人に比べて物理的な距離も発生し、このような結果になったのではないかと考えられる。

本研究の対象者は関係の相互隔離低群の方が基本的信頼感が高く、友人選択理由においては近接の条件で友人選択をしている。すなわち、関係の相互隔離という関係の持ち方をしていない人は基本的信頼感が高いが、近接

という表面的な理由で友人選択をしているということである。岡田(2007)は、“友だちを選ぶ理由は物理的近さなど表面的に目に見える特徴から、次第に相手の人柄など内面的な特徴に着目したものへと変化する”と述べている。これらのことから、基本的信頼感が高く良好な対人関係を築いていたとしても、友人の選択理由は小さい子どもと同じようなものであり、友人関係の良好さとはまた別に心理的な成長が青年期としては未熟な人が存在しているということが窺える。

③対象切替について

状況に応じて複数の対象を切り替えるという対象切替をおこなっている人は最も少なかった。また、対象切替と他尺度との関連については、対象切替低群の方が対象切替高群よりも友人関係満足度が高いという結果が得られた。自己切替と関係の相互隔離では満足感に有意な差は見られなかったが、対象切替では高群と低群の間に友人関係満足度において差がみられた。対象切替にのみ友人関係満足度において差があるということは興味深いことである。このことについて、高坂(2010)は、“異質な存在を拒否する傾向(異質拒否傾向)をもっていると友人関係満足度が低下する”ということを示している。場面に応じて付き合う相手を代えるという友人との付き合い方が、異質な存在を拒否している付き合い方であるとはいきれないが、相手を代える上で異質な存在を拒否していて、そのことが友人関係満足度の低さと関係しているということも考えられる。また、友人関係においてその場面によって相手を代えるという付き合い方は、その場面において適当な人を選択しているので満足感を得られそうな印象があるが、本研究では、そのような友人との付き合い方は友人関係満足度を高めないということが分かった。松下(1969)は、“青年期には多数の友人を求めるよりも、深い心のつながりをもった2, 3人の少数の親友を求めるようになる”と述べている。このことから、どのような場面においても関係性を保ち続けられる親友と呼べるような友人関係の方が友人とのつながりを感じることができ、友人関係における満足度も高くなり、逆に対象を切り替える友人関係の持ち方は満足度が低くなると考えられる。

また、友人選択理由について、対象切替低群の方が対象切替高群よりも友人選択の際に相手の性格(相手の性格が優しい・性格が似ている・意見や考え方が似ている)を重視しているという結果が得られた。そして、対象切替高群の方が対象切替低群よりも、友人選択の際に自己の利益(物を貸してくれる・いろいろと手伝ってくれる・面白い人だから)を重視しているという結果が得られた。つまり、対象切替をする際には、相手の性格は重視せず、自己の利益は重視するということである。そして、対象切替という友人関係の持ち方と、友人関係満足

度・友人選択理由について併せて考えると、対象切替をおこなう人は相手の存在がどのようなものかということより、その状況下において適した人や、自分の利益となるような人を選ぶような付き合い方をしているので友人とのつながりがあり感じられず友人関係における満足度も低いのではないかということが考えられる。また、友人選択理由においては、青年期では内面的な理由で友人を選択するといわれているが、自己の利益を優先しているため、そのことが青年期である被検者の友人関係において友人関係満足度の低さに影響を与えているということも考えられる。

また、自己切替と関係の相互隔離では基本的信頼感との関連がみられたが、対象切替においては基本的信頼感との関連がみられなかった。金子(2002)は、“基本的信頼感とは青年期の良好な対人関係や親密性と関連している”ことを示している。このことから、対象切替という関係の持ち方においては、基本的信頼感ではない他の何らかの要因によってそのような関係を持つか持たないかということが規定されている可能性があると考えられる。

2. いじめられ経験の有無と他要因の関連について

友人関係の持ち方や、友人の選択理由について、これまでの友人関係、特にいじめについて関連があるのではないかという考えのもと、いじめられ経験と他の要因について検討した。その結果、いじめられ経験がある人の方がいない人よりも友人選択の際に相手の能力を重視するという結果が得られた。この結果から、いじめられ経験のある人は、相手の能力の高さを重視して友人選択をしているといえ、このことから、いじめられたことがある人は、相手の能力(いろいろなことを知っている・頭がいい・いろいろなことを教えてくれる)が高いほど、いじめが発生しにくいと感じているのではないかということが考えられる。

大野(2004)は、“いじめの被害者は心身ともに大きなダメージを受けることが多く、社会性を発達させる重要な機会が狭められやすい”と述べている。しかし、過去のいじめの経験と友人関係の切替については関連がみられなかった。中島(2007)によると、“いじめを体験したことが友人関係に与える影響は、友人関係における不信や不安、友人への共感・思いやりなどの側面への影響がある”と述べているが、友人関係の切替といじめられ経験のあり・なしについて関連がみられなかったということは、友人関係を場面に応じて切り替えるということといじめの経験に関連する不信や不安、共感・思いやりといった感情は関係ないということが考えられる。しかし、いじめと友人関係の切替について関連がみられなかった理由として、いじめの内容についていつ受けたものなのかということやその程度、結末などの調査をおこなって

いないために関連がみられなかったということも考えられる。この点については今後さらに調査することで今回とは違った結果が得られるということも考えられる。

3. 友人関係希薄感について

友人関係希薄感について五件法で回答を求めたところ、本研究の対象者である現代の女子大学生においては自己の友人関係を希薄だとあまり感じていない人が多いという結果が得られた。千石 (1991) によると、「近年、青年期の友人関係における“希薄さ”が指摘されており、内面を開示するような深く親密な友人関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけあわないように表面的に円滑な関係を志向したりする傾向がみられる」とされている。しかし、現代の女子大学生が実感として自己の友人関係を希薄だとは捉えていないというこの結果は、大谷 (2007) が示しているように、状況に応じた切替にも注意を払いながら友人関係を捉えていくことの重要性を示す結果ではないだろうか。

謝 辞

本論文は平成 23 年度長崎純心大学人文学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。卒業論文にあたりご指導をいただきました、長崎純心大学人文学部丸山仁美先生に厚く感謝を申し上げます。ならびに、お忙しい中丁寧にご指導を賜りました九州大学大学院人間環境学府 福留留美先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達の变化 風間書房
- Erikson, E. H. (1959). Identity and the life cycle New York: W. W. Norton & company (Reissue, 1980).
- 小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子 (訳) (1973). 「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- 橋本秀美・三島浩路・山本華世 (2008). 学校場面でのいじめと友人関係について—女子大生における小・中・高の振り返り調査から— 日本教育心理学会総会発表論文集, **50**, 361.
- 井上隆二・井田政則・高橋一公・山村 豊 (2005). 発達心理学 ナツメ社
- 金子俊子 (2002). 青年期女子の愛着スタイルが他者関係に及ぼす影響—基本的信頼感から親密性へのプロセスについて— 大阪産業大学論集人文科学編, **106**, 31-49.
- 高坂康雅 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不

- 安と被異質拒否傾向—青年期における変化と友人関係満足度との関連— 教育心理学研究, **58**, 338-347.
- 松永真由美・岩元澄子 (2008). 現代青年の友人関係に関する研究 久留米大学心理学研究 **7**, 77-86.
- 中島千加子 (2007). 女子大学生の友人関係におけるいじめの加害・被害体験の有無とその影響 日本教育心理学会総会発表論文集, **49**, 508.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 大野 久・平石賢二・佐藤有耕・宮下一博・白井利明 (2010). エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房
- 大野俊郎 (2004). 自己理解のための青年心理学 八千代出版
- 大谷宗啓 (2007). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替—心理的ストレス反応との関連にも注目して— 教育心理学研究 **55**, 480-490.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究 **43**, 354-363.
- 岡田 努 (2007). 現代青年の心理学—若者の心の虚像と実像 世界思想社
- 千石 保 (1991). 「まじめ」の崩壊—平成日本の若者たち— サイマル出版
- 菅原真理子 (1979). 現代ヤングレディ考—その実像と国際比較— 中央法規出版
- 鈴木素子・寺崎正治・金光義弘 (1998). 青年期における友人関係期待と、現実の友人関係に関する研究 川崎医療福祉学会誌, **8**, 55-64.
- 鈴木伸一・島田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬楚力也・坂野雄二 (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, **4**, 22-29
- 谷 冬彦 (1996). 基本的信頼感尺度の作成 日本心理学会第 60 回大会発表論文集, 310
- 富田充保 (2000). 青少年と人間関係—その行く末と課題—門脇厚司・久富善之 (編) 現在の子どもがわかる本—日本教育学会課題研究「変化する社会と子どもの異変」報告書— 学事出版
- 辻 泉 (2006). 「自由市場化」する友人関係—友人関係の総合的アプローチに向けて 岩田 孝・羽淵一代・菊池裕生・苦米地伸 (編) 若者たちのコミュニケーション・サバイバル—親密さのゆくえ 恒星社厚生閣
- 吉岡和子・高橋紀子 (2010). 大学生の友人関係論 友だちづくりのヒント ナカニシヤ出版